

INSIGHTOUT

ROUND #5

子供の生活10年変化

暮らしの「3点確保」に向かうアフターバブル・キッズ

生活総研

失われた10年は、 日本の子供たちを、 どう変えたのか。

生活総研の提言活動INSIGHTOUT、今回のテーマは「子供の生活」です。1997年、私たちはローティーンを対象とした《子供調査》を実施しました。時代の変化や様々な環境を“スイスイ”と動き回る彼らを「少子化時代のアメンボ・キッズ」と名付け、その意識や行動を明らかにしました。それから10年を経た今年、現在のローティーンである10歳から15歳に対して、再び同じ質問による定量調査を実施。1997年と2007年の2時点を比較しつつ、更に定性的なアプローチを使ってナマ声の収集も行いました。今回の調査対象者は1992年から1997年に生まれた「アフターバブル・キッズ」。社会の閉塞期でもある「失われた10年」に生まれ育った彼らが、厳しい時代背景の影響を受けながら、どのように生活を営んでいるのか？それは10年前の“スイスイ”とどう違うのか？今回のレポートでは、こうした彼らの生活の意識や行動を、詳細な調査データを使って明らかにするとともに、「子供」という次世代ターゲットを捉えるための新たな観点もお届けいたします。未来市場を発想する際の一助として、ご活用いただければ幸いです。



アフターバブル・キッズが生まれ育ったこの10年。

この10年で子供たちを取り巻く環境はどう変わったのか？
子供たちの意識や行動を理解するための大前提として、アフターバブル・キッズが育った社会環境についてご紹介します。「最近の子供たちは…」「そもそも子供とは…」といった、これまでの「子供」に対する既成概念は少し横においていただき、まずは彼らがどんなふうになってきたかを認識することから始めましょう。

大人に囲まれて育つ

少子化が止まりません。子供の数はどんどん減っています。この10年で年少人口(0歳から14歳)は約250万人弱減りました。今回の対象者である年代層に限っても130万人強のボリュームダウンです。逆にいえばこの10年で大人の存在感は高まっています。子供からすれば、自分の周りの大人の数がどんどん増えているように感じられるでしょう。大人人口(=総人口-年少人口=勤労者人口+老年人口)を年少人口で割れば、子供一人の周りに何人の大人がいるかがわかります。2005年の国勢調査から計算すると、子供一人の周り

には6人以上の大人がいることになります。30年以上前の1970年は子供一人に対して大人約3人。戦前の1940年は子供一人の周りに大人は2人弱でした(1.7人)。現代の子供たちがいかに多くの大人(の目)に囲まれて、生活しているかがわかります。

学校のクラスも同じ傾向です。1クラス当たりの生徒数は小学校、中学校とも漸減しています。これも子供から見れば、先生の目が一人ひとりの生徒により行き届くようになっていくということ。社会全体はもちろん、子供が主役の学校ですら、子供たちの周りには多くの大人たちがいます。大人に囲まれて育った、それがアフターバブル・キッズです。

改革され続けた教育制度

教育制度はこの10年間、めまぐるしく変わり続けました。まずは1998年「学校教育法」の改正により、中等教育学校が認められます。これによって公立学校でも「中高一貫教育」が可能になりました。同じ年「完全学校週5日制」や「学習内容3割削減」「少人数授業」等、いわゆる「ゆとり教育」施策を

盛り込んだ「学習指導要領」が小学校、中学校について改訂(高等学校などは翌年改訂)。2000年からはその一施策である「総合的な学習の時間」、いわゆる「総合学習」の授業が段階的に導入され、2002年からは「ゆとり教育」の施策全般が実施されました。ところが2005年には当時の中山文科相の授業時間数見直しの要請、今年には安倍内閣教育再生会議からの7つの提言の一つとして「ゆとり教育見直し」が挙げられるなどしています。2006年には60年ぶりに教育基本法が改正され、その流れで2007年には教育職員免許法、地方教育行政法、学校教育法の教育3法が改正されています。恒常的な教育制度の変化に対応しながら学ばざるを得なかったのがアフターバブル・キッズたちなのです。

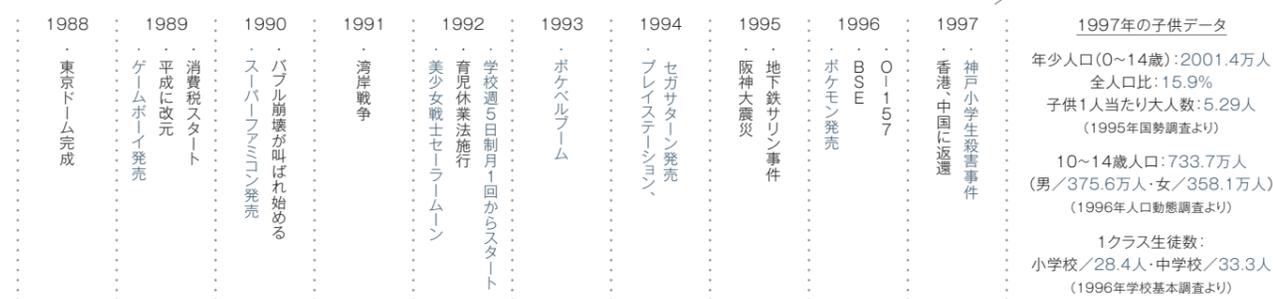
生まれたときからデジタル社会

この10年で瞬く間に浸透した社会インフラといえば、やはりインターネットと携帯電話でしょう。総務省の統計によれば、インターネットの利用者人口は2006年に8,754万人、携帯電話の普及台数は今年9月に9,933.4万台にまでなりま

した。今の子供たちはまさにデジタル社会の申し子。彼らが育ったこの10年はまさにIT化が急速に進んだ10年でした。内閣府の今年発表の調査によると、携帯電話の使用率は小学生で31.3%、中学生で57.6%、パソコンの使用率も小学生で77.4%。中学生で81.2%です。更に昨年頃から、GPS機能付きや有害サイトの閲覧を制限する子供用携帯電話も登場。子供が犠牲になる凶悪事件が増加しており、セキュリティ端末として携帯電話を持たせることも一般化しています。遊具品と必需品の両方の意味で、デジタル機器を使いながら成長した彼らは、生まれながらのデジタル世代なのです。

アフターバブル・キッズが生まれ育ったこの10年は、少子化、教育制度改革、デジタル化と、子供たちを取り巻く環境が激しく変化した時代といえます。こうした社会環境を前提とした時に、彼らにはどのような欲求が生まれるのでしょうか。今回の調査結果の中から、彼らの欲求変化をまずご紹介したいと思います。

アメンボ・キッズが育った10年



アフターバブル・キッズが育った10年



繁忙化するアフターバブル・キッズの欲しいもの。

●繁忙化する子供生活

	1997年 子供調査	2007年 子供調査	10年変化
時間的ゆとりがない	30.6%	41.6%	+11.0
朝ごはんを一人で食べる	24.0%	31.0%	+7.0
起床時間／就寝時間	7時01分／22時38分	6時46分／22時41分	-15分／+3分
塾に通っている	43.9%	47.0%	+3.1
塾帰宅時間	20時09分	20時25分	+16分

●「いい成績」と「時間」と「自由」が欲しい子供たち

◎自分が欲しいもの				
	1997年 子供調査		2007年 子供調査	10年変化
1位	お金 59.6%	→	1位 お金 54.8%	-4.8
2位	いい成績 44.9%	→	2位 いい成績 54.0%	+9.1
3位	ツキ・運 34.3%	↘	3位 時間 35.5%	+9.4
4位	自由 26.6%	↗	4位 自由 33.0%	+6.4
5位	時間 26.1%	↘	5位 ツキ・運 27.1%	-7.2

●テレビやゲームをするよりも、眠りたい、友達と遊びたい、ぼんやりしたい

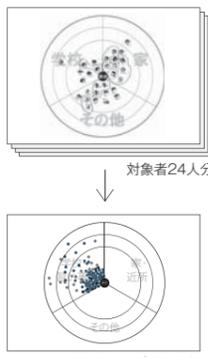
◎もっと増やしたい時間				
	1997年 子供調査		2007年 子供調査	10年変化
1位	友達と過ごす時間 63.5%	↗	1位 すいみん時間 64.9%	+3.2
2位	すいみん時間 61.7%	↘	2位 友達と過ごす時間 61.9%	-1.6
3位	テレビを見る時間 38.7%	↗	3位 ぼんやりする時間 31.9%	+9.2
4位	テレビゲームをする時間 29.9%	↘	4位 テレビを見る時間 29.0%	-9.7
5位	ぼんやりする時間 22.7%	↗	5位 勉強する時間 26.0%	+7.2

少子化、教育制度改革、デジタル化。自分たちを取り巻く激しい環境変化に対応するために、忙しい日々を送る子供たちの実態が窺えます。「時間的ゆとりがない」が10ポイント以上も上昇しているのを筆頭に、「朝ごはんを一人で食べる」子供も約3割へと増加。遅寝早起きの傾向も見られます。そんな日常を反映してか、「自分が欲しいもの」ももっと増やしたい時間の両方で「忙しさ解消ニーズ」が上位に挙がっています。

「自分が欲しいもの」では、3位の「時間」、4位の「自由」がポイントを大きく伸ばしています。特に「時間」は伸び率1位です。「もっと増やしたい時間」でも1位の「すいみん時間」の強さは相変わらず。また前回の5位から今回3位に上昇した

「ぼんやりする時間」は、伸び率で1位。忙しさ解消ニーズはこれからも大きな可能性がありそうです。続いて「勉強ニーズ」。度重なる教育制度の改定にも対応せざるを得ない子供たち。勉強系の項目が上位に挙がってきています。「自分が欲しいもの」を見れば、1位の「お金」に迫る勢いで「いい成績」が2位。伸び率も「時間」に続く9.1ポイント。さらに「もっと増やしたい時間」でも「勉強する時間」がランク外から5位にランクインし、伸び率は7.2ポイントとこちらも高い。通塾率も4割強から5割弱へと若干ながら上昇していて、塾からの帰宅時間も遅くなっています。授業数を減らした「ゆとり教育」は、皮肉にも子供たちの生活からゆとりを奪うことになっています。

調査概要

<p>●1997年「子供調査」 調査設計 調査地域：首都圏40km 調査対象：1997年3月31日現在で小学4年生から中学2年生に在学する男女 サンプル数：1500人 サンプル構成： 男女計 男子 女子 小学4年生 300 150 150 小学5年生 300 150 150 小学6年生 300 150 150 中学1年生 300 150 150 中学2年生 300 150 150 合計 1,500 750 750 調査方法：訪問留置自記入法 調査実施期間：1997年3月7日～3月31日</p>	<p>●2007年「子供調査」 調査設計 調査地域：首都圏40km 調査対象：2007年7月1日現在で小学5年生から中学3年生に在学する男女 サンプル数：800人 サンプル構成： 男女計 男子 女子 小学5年生 160 80 80 小学6年生 160 80 80 中学1年生 160 80 80 中学2年生 160 80 80 中学3年生 160 80 80 合計 800 400 400 調査方法：訪問留置自記入法 調査実施期間：2007年6月18日～7月9日</p>	<p>●ヒト・モノ・場所を巡る「子供心理マッピング調査」 調査設計 調査地域：東京、大阪、静岡 調査対象：2007年7月1日現在で小学5年生から中学3年生に在学する男女 サンプル数：24人 サンプル構成： 全国計 東京 大阪 静岡 小学5、6年生 12 4 4 4 中学1～3年生 12 4 4 4 合計 24 8 8 8 調査方法：デブスインタビュー ヒト、モノ、場所について自分との心理的距離を測るマップを作成してもらい、それについて質問をしていく。 自分の部屋の写真や、お気に入りのものを見せてもらう。 調査実施期間：2007年7月23日～7月31日</p>	 <p>対象者24人分 ドットマップ化し分析</p>
<p>●参考「生活定点2006」 調査設計 調査地域：首都圏40km圏、阪神30km圏 / 調査対象：20歳～69歳男女 / サンプル数：3498人 / 調査方法：訪問留置自記入法 / 調査実施期間：2006年5月17日～6月5日</p>			

暮らしの「3点確保」に向かう アフターバブル・キッズ。

子供たちは、10年の時を経て、「気ままな3点暮らし」から、「意識的に暮らしを3点確保」するようになりました。

かつては、自分で自分を守る必要などなかったけれど、今は、学校では緩やかな「関係」を確保し、

家ではしっかり「休息」を確保、興味関心の場では思い切り「自我」の確保をしています。

意識して努めなければバランスを崩してしまいます。

3つをしっかり保つことで暮らしを確かなものにし、成長していくのがアフターバブル・キッズ。

大人から見れば、忙しいスケジュールをかいくぐりながら3点確保することは、かなり大変そうに見えますが、

当の子供たちにしてみれば、生まれながらにしてこの状況。

悲壮感の中、懸命にバランスをとっているというほどのことでもなく、

意外と状況をすんなり受け入れ、その中で、やりくりしているといった現状のようです。

学校で、
関係確保

家で、
休息確保

興味関心の場で、
自我確保

学校では友達と緩くつながっていたい。

関係確保

「前のクラスの友達とも、
うまく付き合っていないとね」

(東京／中2女子)

友達の数、この10年で顕著に伸び、51人から67人へと16人も増えました。

子供たちの「もっと知りたいこと」の第1位は、

タレントやテレビ番組の話抜いてダントツ、そんな友達のこと。

深く付き合いたいとも思っています。

特に同性の友達は心理的距離も近い存在です。

でも、67人という人数は多すぎるのか、大人以上に、

その間柄によって連絡法を意識して使い分けているのも事実です。

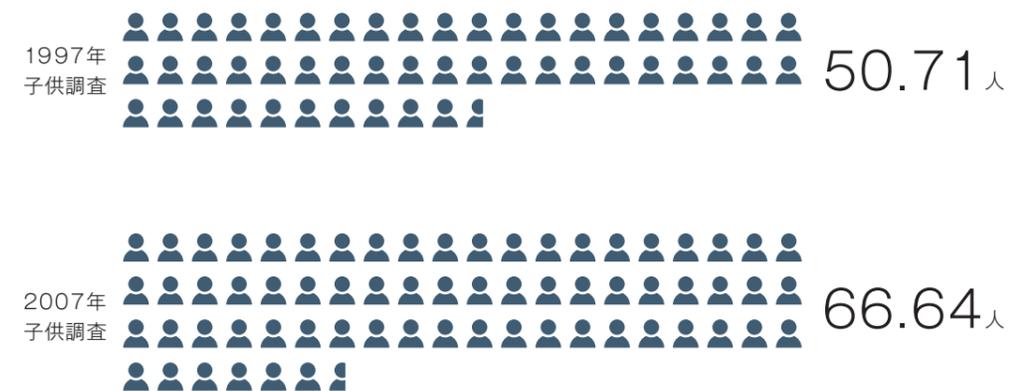
おそらく、携帯電話など駆使して区別しているのでしょう。

毎日の学校生活で、子供たちは、友達とうまくやっていくために、

緩やかな友達関係をキープしているのです。

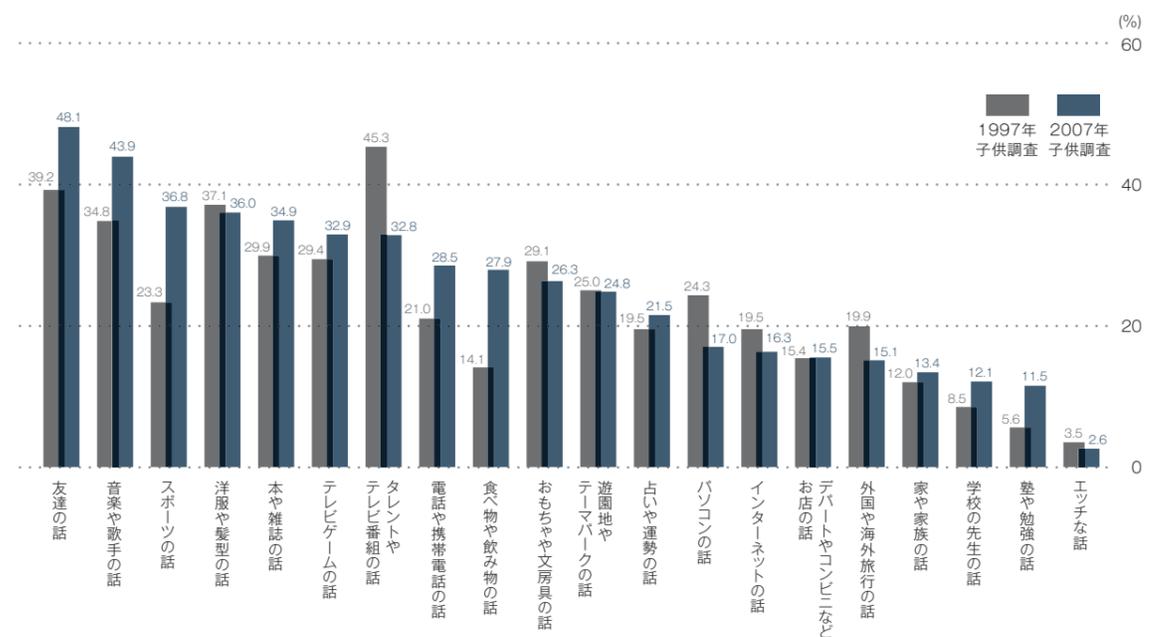
ともだち100人できるかな。友人数は、51人から67人へ増大。

◎あなたの友達は何人ぐらいいますか(OA)〈グラフ1-1〉



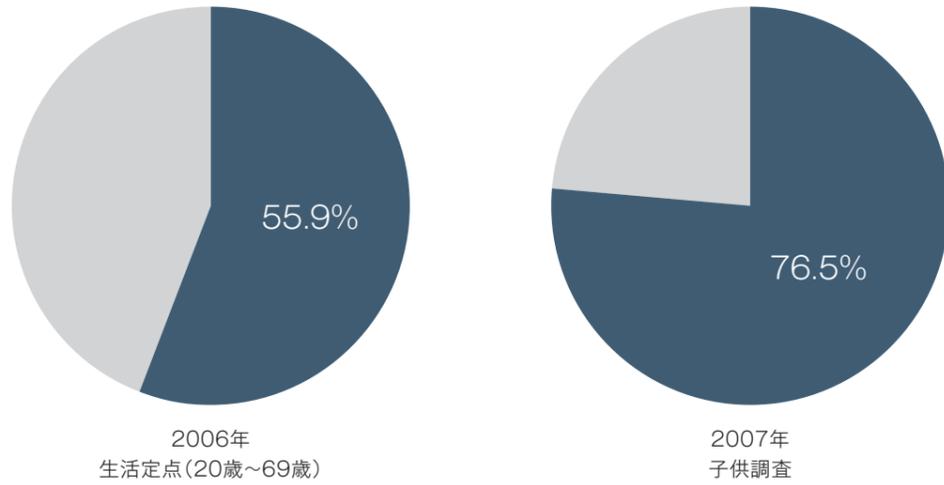
もっと知りたいことのNo.1は、「友達の話」。

◎あなたが今、もっと「知りたい」と思うことはどんなことですか(MA)〈グラフ1-2〉



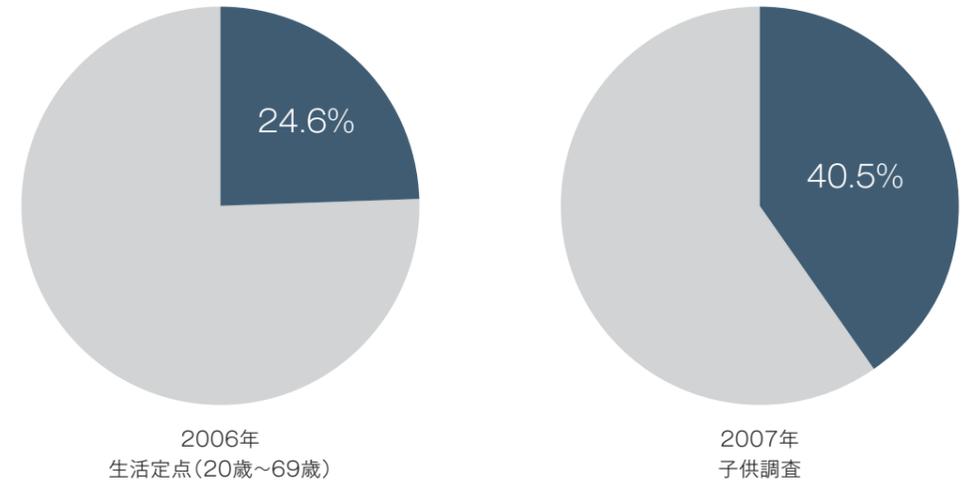
人と深く付き合いたい意識は、大人より子供たちの方が強い。

◎人と交際する時には、深くつきあいたい方だ<グラフ1-3>



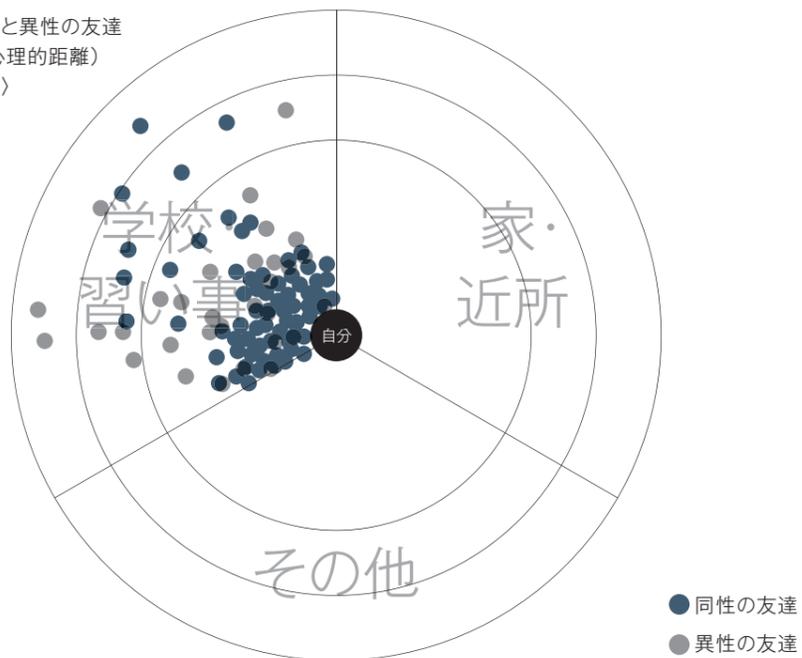
大人より、子供たちの方が友人関係の使い分けをしている。

◎友達でも、その間柄によって連絡の方法(電話、携帯電話、電子メールなど)を意識して区別する方だ<グラフ1-5>



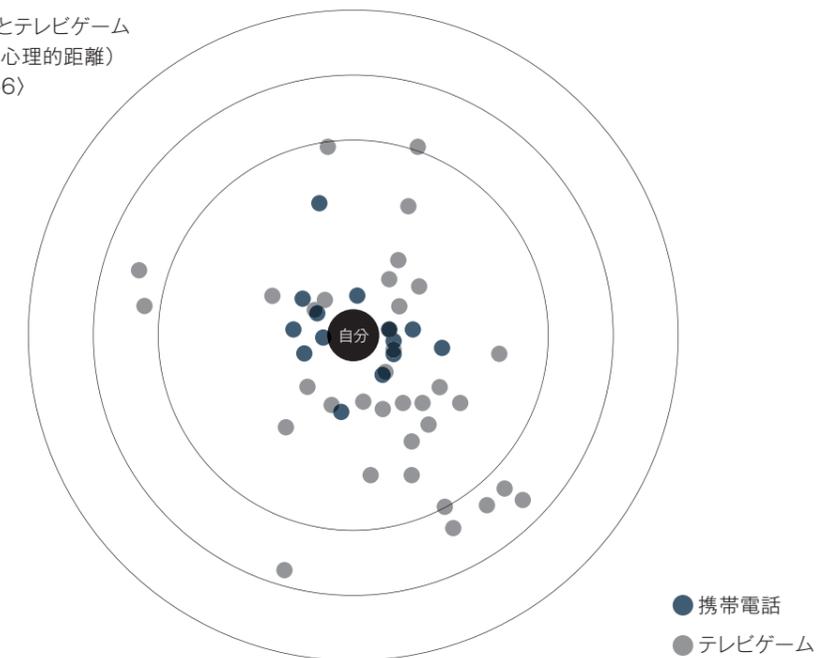
同性の友人は、心理的距離がかなり自分に近い。

◎同性の友達と異性の友達
(自分との心理的距離)
<グラフ1-4>



自分に近い存在は、ゲームより携帯電話。

◎携帯電話とテレビゲーム
(自分との心理的距離)
<グラフ1-6>



家ではしっかりと癒されたい。

休息確保

「部屋のクッションに座っているときに、
一番落ち着くかな」

(静岡／小6男子)

学校で、関係確保している子供たちにとって、

どうやら家は癒しの場所のようです。

家出は考えなくなりました。

疲れたら帰って休む空母のような存在なのでしょう。

だから、両親には、友達のこともよく話し、コミュニケーションは上々です。

こそこそ隠す秘密も減りました。

そんな家の中でも一番自分らしくいきいきできる場所は、自分の部屋です。

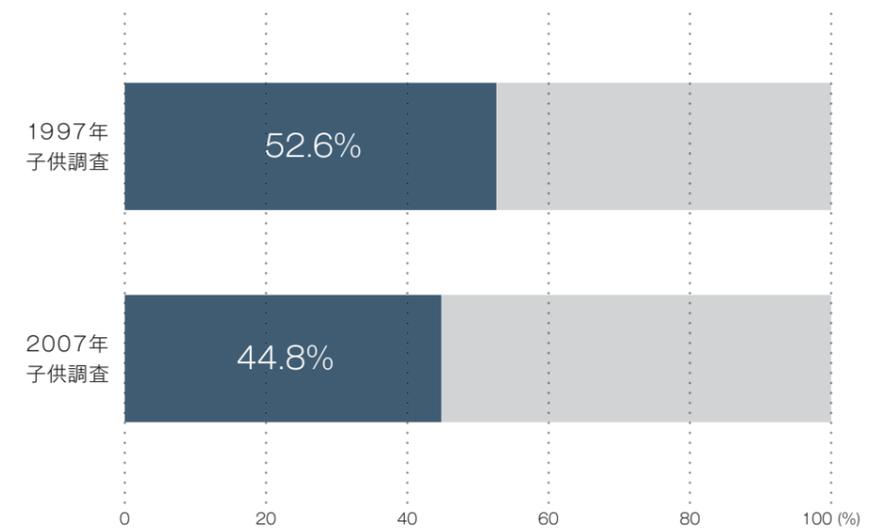
1日をリセットし、また明日元気に飛び立つために、

本を読んだりドラマや映画を見て泣いたりして自分を解放し、

しっかり自宅で休息確保している子供たちです。

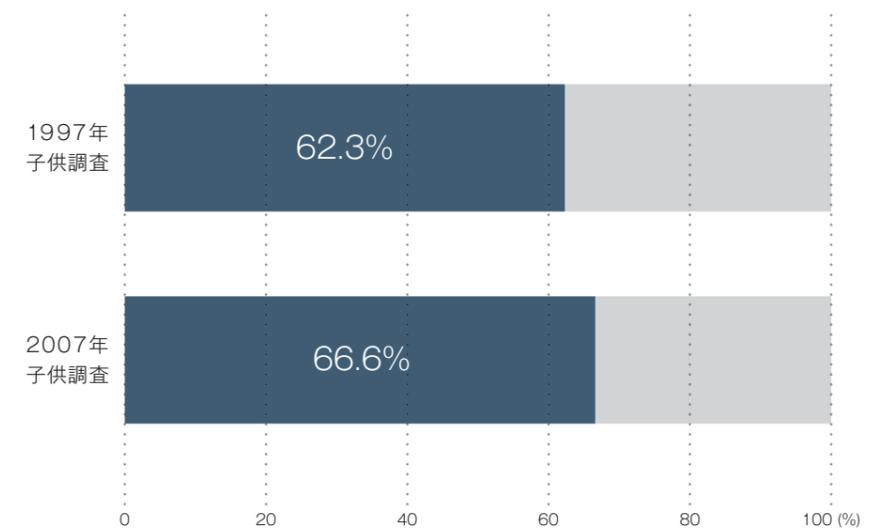
家出はしたくない。家は子供にとって空母のようだ。

◎家出をしたいと思ったことがある(グラフ2-1)



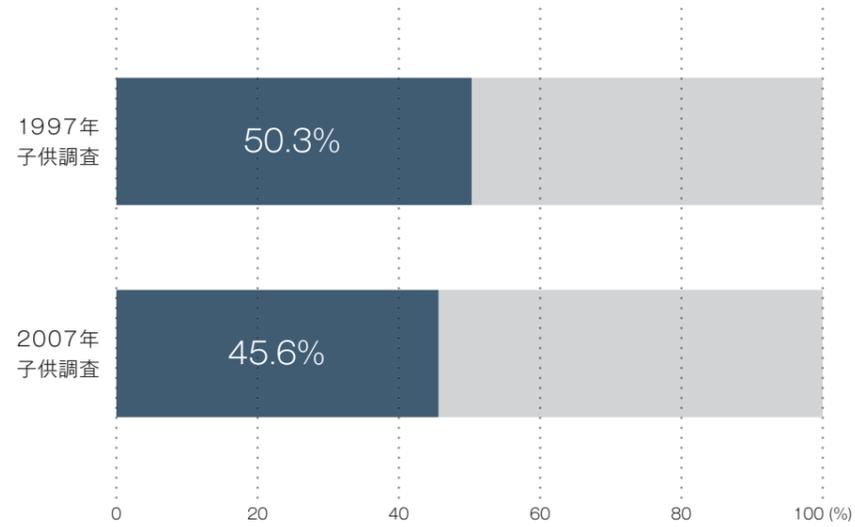
親子コミュニケーションは、上々。

◎友達のことを、よくお父さんやお母さんに話す方だ(グラフ2-2)



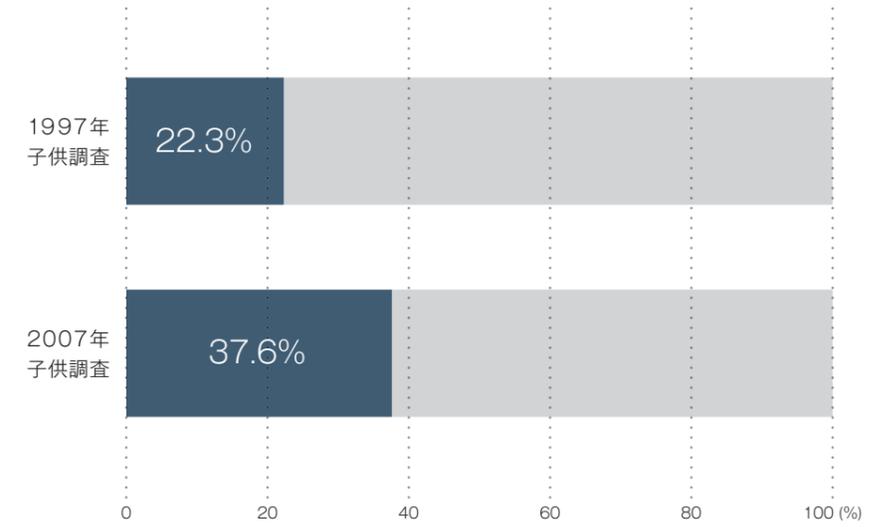
家族には、オープンマインド。

◎家族にいていない秘密がある(グラフ2-3)



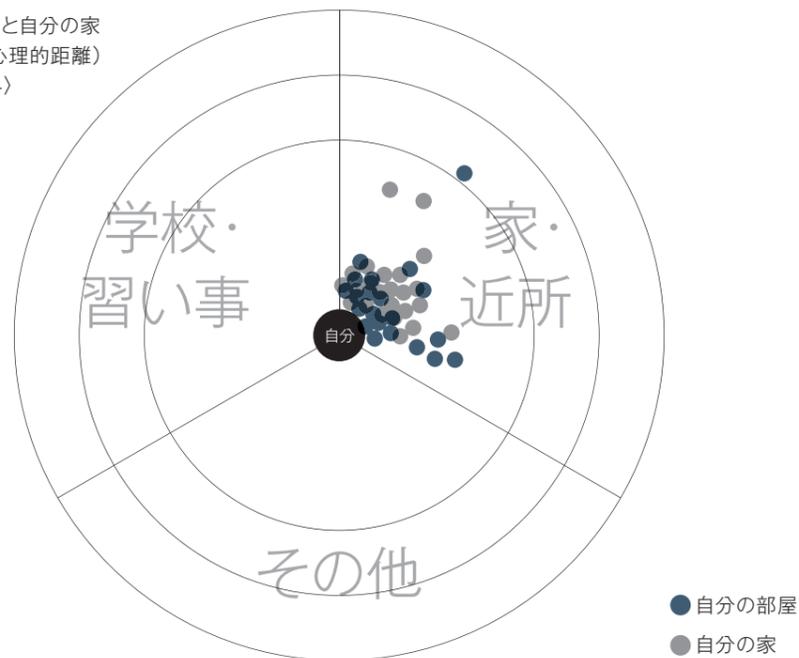
「本をあまり読まない子供たち」から「読書する子供たち」へ。

◎本(文学全集、図鑑など)をよく読む(グラフ2-5)



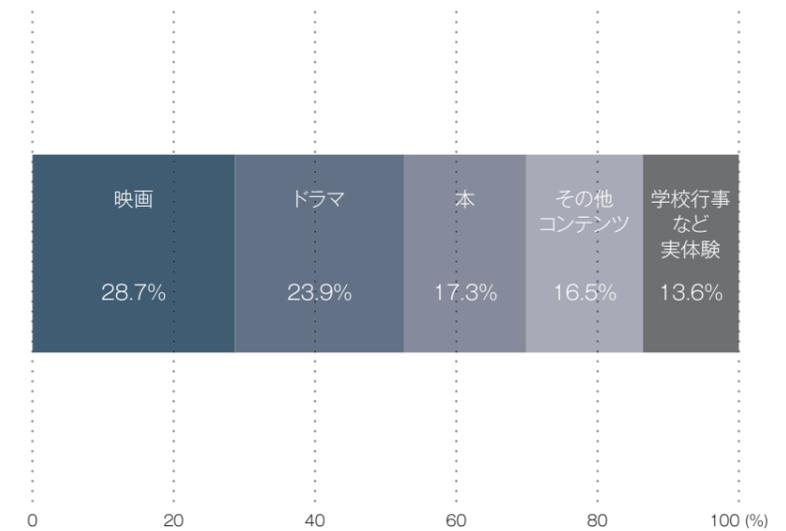
一番自分らしくいられる場所は、「自分の部屋」。

◎自分の部屋と自分の家
(自分との心理的距離)
(グラフ2-4)



涙を流すのは、実体験より本や映画やテレビドラマの中で。

◎あなたが最近感動して泣いたことは何ですか(2007年子供調査のOAを集計)(グラフ2-6)



N=248

興味関心の中で自分を育てたい。

自我確保

「普段は『おとなしい』って思われてますが、私は舞台上に立つと、本当の自分になれるんです」

(大阪／中2女子)

友達づくりに勉強にと、日々忙しい子供たちですが、

興味関心の中でも、しっかり自分を確保しようとしています。

まず、興味のある話は自分で調べます。

今してみたいことで大きく伸びたのは、

好きなスポーツをし続けることと、山のように本を買って読み続けること。

実際、自我を形成する場となる習い事も、

親の勧めではなく、自分の意志で決めています。

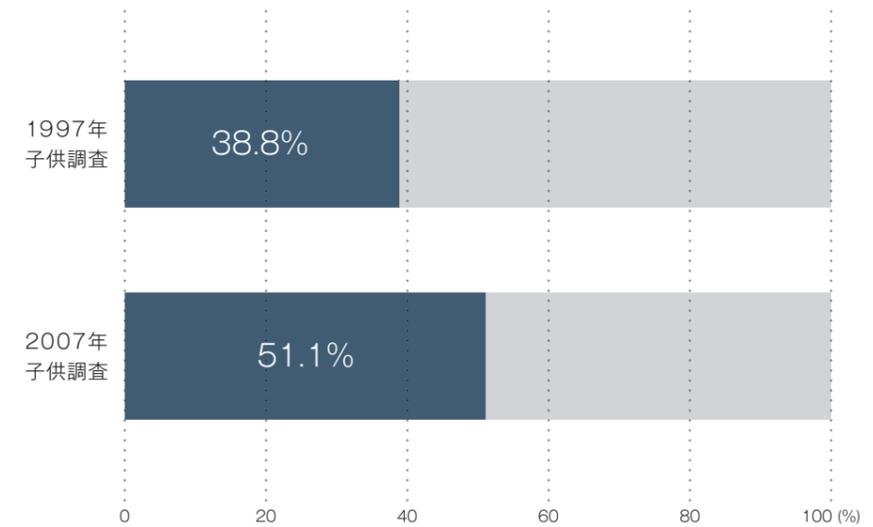
そんな彼らがドキドキわくわくするときは、習い事や部活などの発表の舞台です。

習い事は学校と同じくらい心理的に近い距離に位置しています。

もちろん自我を強化するための、ライバルも存在します。

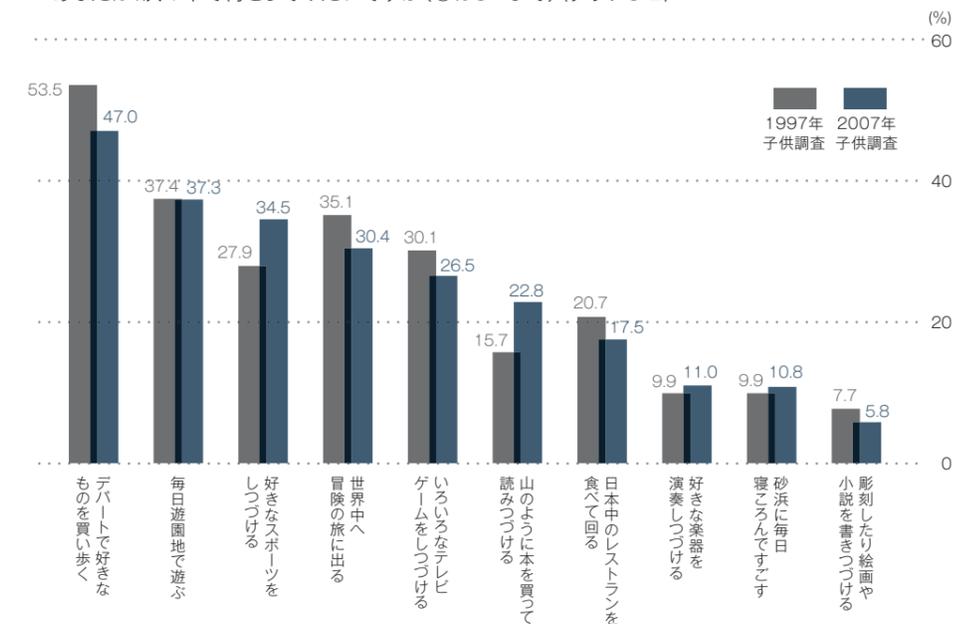
興味ある話は、人に聞くより自分で調べる。

◎興味ある話は、人に聞くより自分で調べる方だ(グラフ3-1)



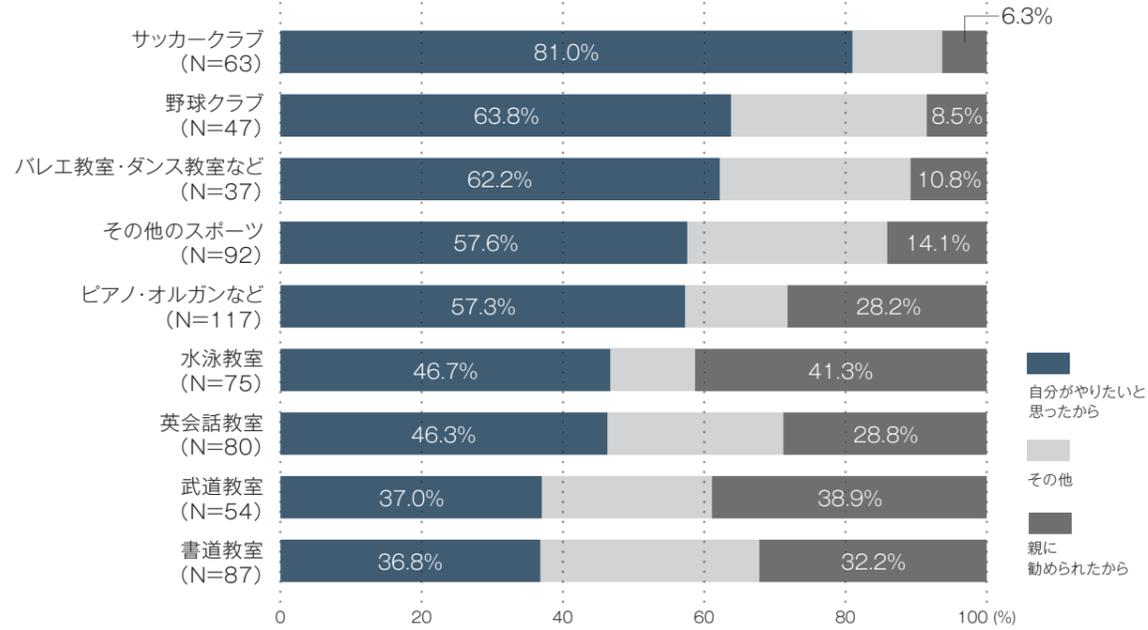
今してみたいことで大きく伸びたのは、好きなスポーツをし続けることと、山のように本を買って読み続けること。

◎あなたの今の年齢やお金、時間のことを考えにいれないで、また、親にしかられることもないとしたら、あなたは、次の中で何をしてみたいですか(○は3つまで)(グラフ3-2)



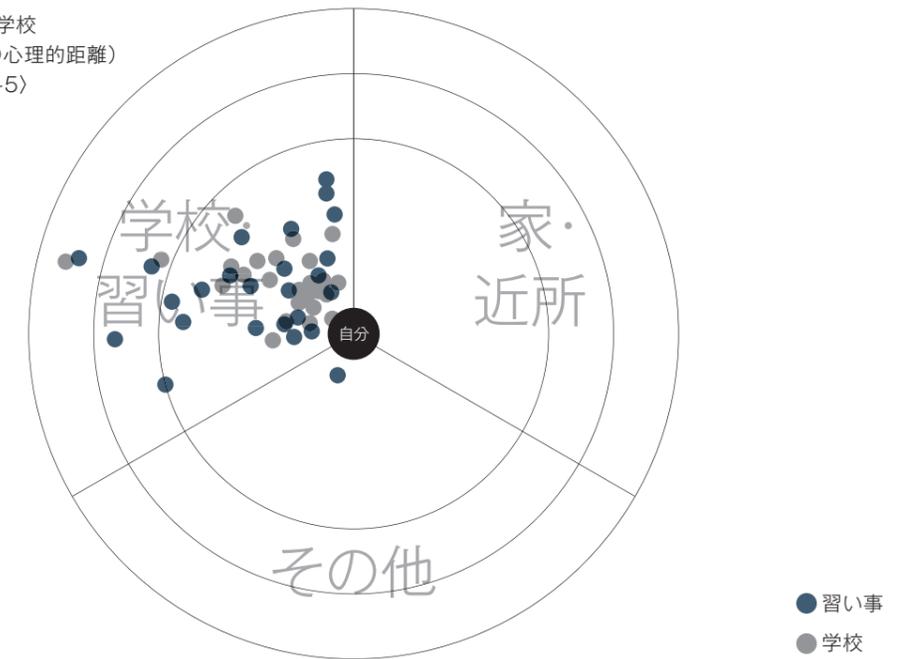
習い事は自発的に決める。

◎習い事のきっかけ／2007年 子供調査(グラフ3-3)



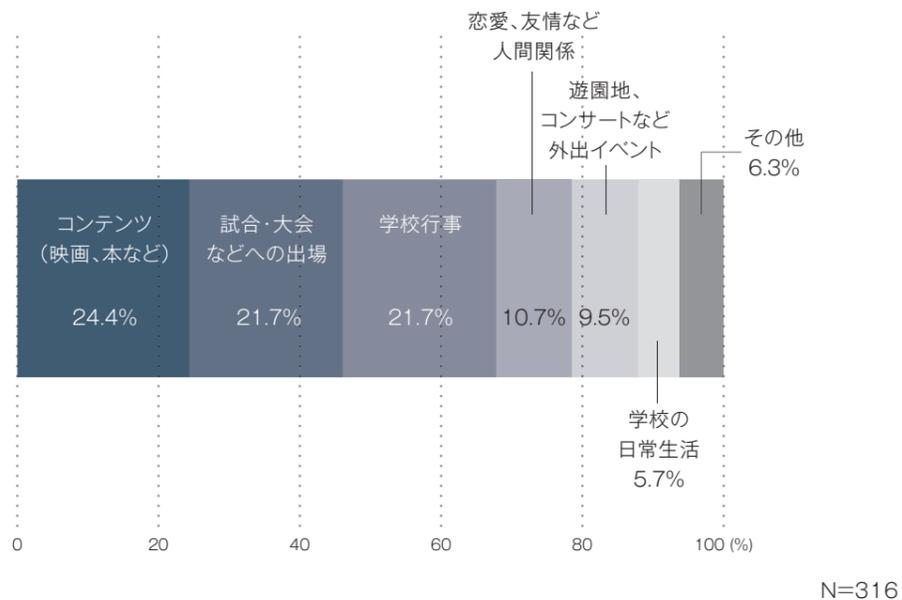
習い事の場合は、学校ぐらい心理的に近い。

◎習い事と学校 (自分との心理的距離) (グラフ3-5)



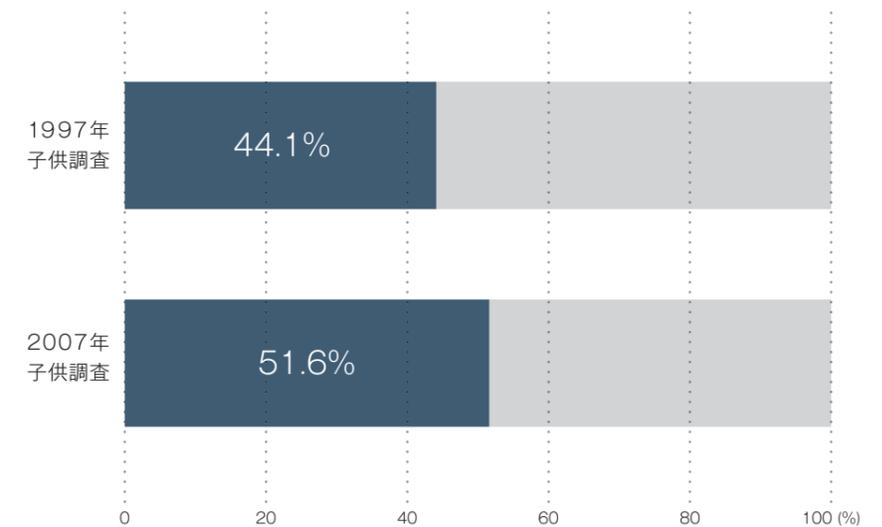
ドキドキわくわくするのは、習い事や部活での発表や挑戦で。

◎あなたが最近ドキドキわくわくしたことは何ですか(2007年子供調査のOAを集計) (グラフ3-4)



この10年で「ライバルがいる」関係へ。

◎勉強やスポーツなどのライバルがいる (グラフ3-6)



バランス 「3点確保」から「3点融和」へ。

「減欲内向」する子供たち

1997年と2007年の2時点比較を中心に、アフターバブル・キッズたちの意識と行動を見てきました。学校・家・自分の興味関心の場という3点で、それぞれ関係・休息・自我を保ちながら、暮らしを確かなものにしてきた子供たち。その姿はクールなやりくり上手のようであり、かなりのバランス感覚を必要としているようにも見えます。3点確保しつつ、日々の生活を送るのは厳しいのかもしれませんが。というのも、彼らの流行や消費への関心が10年前に比べて、大きく落ちているのです。まるで外の世界に目を向ける余裕がないかのように。加えて、検索行動の高い浸透率。外から情報を得なくとも、興味のあることを自分で調べればいい。これでは彼らにアプローチすることは至難の業です。

	1997年 子供調査	2007年 子供調査
どうしても欲しいものが思い当たらない	34.7%	42.6%
流行っているものを人より詳しく知りたいほうだ	62.7%	49.1%
速くても品数や種類をおいてある店まで行く方だ	53.5%	39.8%
検索サイト利用者	※	68.5%

3点確保を助ける

3つの新しいマーケットの誕生

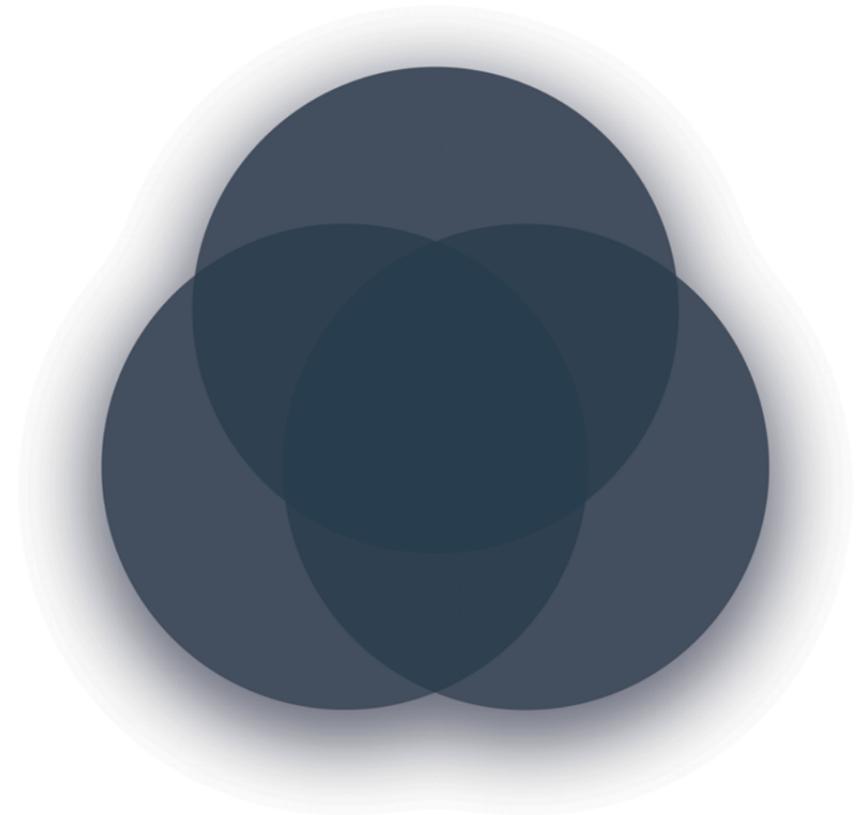
発想を転換してみましょう。3点確保で精一杯だとするならば、その確保実現をサポートするものには、強い欲求が生まれるのではないかと。例えば、心理的距離感の最も近かった携帯電話。子供たちにとって友人との緩い関係を確保するための必需品だからこそ、あの距離感なのでしょう。また、テレビや

ブレンド

ドラマ、本といったコンテンツも、自分の部屋での心の解放という休息を確保できるからこそ、あれだけの支持を得ていたのでしょう。自分から積極的に習い事を行うのも、自我を育てる場や仲間を確保できるからこそです。このように考えれば、確保される3点は、それぞれマーケットに生まれ変わります。友達との緩やかな関係を実現する〈関係確保ツール〉や、深い休息が提供される〈休息確保空間〉、自分づくりのできる〈自我確保コミュニティ〉など。3点確保の市場から、子供たちを支援する新しいサービスやツールがどんどん生まれてきそうです。

バランス生活からブレンド生活へ

子供たちの生活を更に楽しいものにするにはどうすればよいのでしょうか。それには2つのブレンドが必要と考えます。まずは大人のブレンド。親・教師・習い事の先生という3点の大人が1つのチームになり、多面的な目で子供を見守るのです。適切な人からの適切なアドバイスで、子供は3点それぞれを確保する必要から解放され、より楽な生活を送ることができるでしょう。次に子供同士のブレンドです。学校の生徒の前で、子供たちが習い事の発表会を開く、クラス単位で、絵画教室の体験授業を受けるなど、様々な子供たちが交換しあう場を作る。多様な同年代の姿を刺激に、子供たちは自分のアイデンティティや将来の姿など、自己発見を促進させるでしょう。このように3点の確保から3点が融和する生活環境を作るからこそ、私たち大人が子供たちの未来のためにできることだと思ふのです。



INSIGHTOUT

ROUND #5

生活総研

嶋本達嗣

高橋哲久

夏山明美

山本貴代

南部哲宏

吉川昌孝

古澤直木

箕 裕介

斎藤竜太

平澤広子

関沢英彦

藤原まり子

デザイン

松本哲治

株式会社ASTRAKHAN

校閲

株式会社円水社

印刷

日経印刷株式会社

2007年10月30日 発行

通巻6号

発行人

嶋本達嗣

発行所

株式会社博報堂

編集所

博報堂生活総合研究所

東京都千代田区神田錦町3-22

〒101-0054

tel.(03)3233-6450

<http://seikatsusoken.jp/>

Copyright 2007

Hakuhodo Institute of Life and Living.

Hakuhodo Inc.

All rights reserved

Printed in Japan

